最後の宮大工

※宮大工…（お寺を専門に立てる大工）

奈良県斑鳩（いかるが）町にある法隆寺は、一三００年以上前から残る、世界最古の木造建築です。法隆寺の周り全体が世界文化遺産に認められ、世界中からたくさんの見学者が訪れます。観音像などの美術品、金堂などの建物自体の多くが国宝とされ、日本の文化と伝統を今に伝えています。日本が世界に誇る文化財の一つです。

しかし今から八十年ほど前は、法隆寺に訪れる人も少なく、とてもさみしいお寺だったそうです。それどころか、お寺がぼろぼろでも修理をするお金もないような、大変な時代が続いていました。そんな時でも法隆寺を守り続けていた人たちがいます。その中の一人に西岡常一（にしおかつねかず）さんがいます。「最後の宮大工」と言われ、法隆寺の復興に力を尽くした人でした。

西岡常一さんは、明治四十一年（一九０八年）に、代々法隆寺に宮大工として仕えてきた西岡家に生まれました。そして、生まれたときから法隆寺宮大工の棟梁（とうりょう）（宮大工のリーダー）となるべく、宮大工の仕事を教え込まれました。他の子どもが遊んでいるときも、自分はおじいさんの大工仕事を見ている、そんな日々を過ごしていたそうです。

師匠であるおじいさんの教えや自身の努力によって、西岡さんは若くして立派な宮大工となりました。そして昭和九年（一九三四年）、西岡さんが二十七歳のときに、法隆寺の大修理が始まりました。それは西岡さんが棟梁になって、初めての仕事でもありました。しかし、その仕事は想像を絶するほど、けわしいものになっていったのです。

日本全体が戦争に向かって行った時代です。西岡さんは何度も戦争に召集され、日本に戻ったわずかなときに法隆寺を修理したり、戦火から守る仕事を続けました。戦争が終わった後は、荒れ果てた日本の中で貧しい暮らしに耐えなければなりませんでした。他の地域の大工が一日五十円の給料をもらっているとき、法隆寺の宮大工には国が決めた、一日五円五銭しかもらえないような日々が続きました。（当時は一升のお米で二十五円）さらに西岡さんは当時「死の

病」と言われた結核にかかり、二年間、生死の境をさまよいました。その間に仕事はできませんし、家族も養わないといけません。先祖代々伝わった畑や土地を売って何とか暮らしをたてていきました。法隆寺を離れて、別の仕事につくこともできたでしょう。しかし、西岡さんはどんなに苦しくても、仕事がなくても法隆寺を守り続けたのです。

西岡さんが結核に倒れる一年前、さらに追い打ちをかけるようなことが起こります。昭和二十四年（一九四九年）、法隆寺で火災※が起こり、貴重な金堂が焼けてしまったのです。大工たちはいの一番に駆（か）けつけ、消火に取り組みました。お寺の住職（じゅうしょく）さんは、燃えさかる火の中に飛び込もうとするのを、必死に止められていたそうです。貴重な文化財の焼失は大きなショックを世の中にあたえました。

しかし、その火事がきっかけで、国から「法隆寺を守ろう」という動きがでてきたのです。宮大工の給料も改善されました。また、全国から優秀な宮大工が集まり、法隆寺の復興が大きく動き出しました。もちろん、それをまとめる棟梁は西岡常一さんです。

西岡さんは、古代の大工道具や、高度な建築技術を現代に再現し、今ある法隆寺をよみがえらせたのです。法隆寺だけでなく薬師寺、法輪寺の復興など、偉大（いだい）な功績を残し、「現代の名工」と言われるようになりました。それは、先祖代々引き継いできた技や、西岡さんが独自で続けてきた勉強があってのことでした。

平成七年（一九九五年）、西岡さんはその命を終えました。今は、西岡さんの教えを受けた宮大工たちが、その技と心を後生に伝えています。

西岡さんはこのような言葉を残しています。

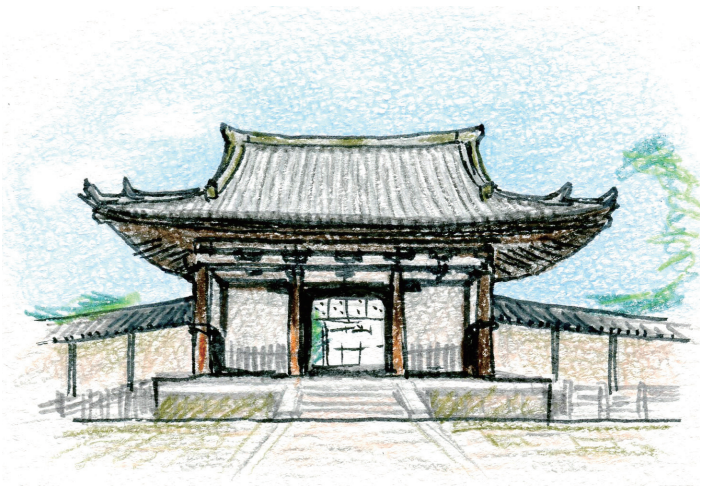
「先祖から何代にもわたって引き継ぎ、残してこられたもんが、私のところで花咲かせてもろうたのかもしれませんな。うしろをふりかえりましたら長い糸に目がまわるほどぎょうさんの人がつながっていますものな。そのはしっこに私がおりますのやろな。（中略）

よく百年、二百年後には西岡のようなものがおらんから木で塔を造ったり、修理は無理やろと言われますが、そんなことはないんです。（中略）

この後の人かて、ちゃんとした物が残されておったら、そこから学び取ることができるんですわ。そのためにもちゃんとした物を残さなあきまへんで。いいかげんな物を造って残したんでは伝わるものも伝わりませんし、そこで伝わってきたものを滅びさせることになりますのや。ちゃんとした物を残すためにはできるだけのことをせなあきまへん。」

※金堂の屋根は、事前に避難させていたため、無事だった。また焼失した壁画も、当時復元にあたっていた画家達が十四年もの歳月をかけて、ほぼ元通りに復元した。

（野村　宏行　作）



最後の宮大工

（高学年 4-（7））

（1）ねらい

我が国の伝統と文化を大切にし、先人の思いや努力を受け継ぎ、郷土や国を愛する心情を育てる。

（2）資料の特質

最後の宮大工と言われた、西岡常一氏の生き方を資料化した。法隆寺は今でこそ日本を代表する寺院として広く知れ渡っているが、以前はさみしい状態が続いていた。自身も大変な中、法隆寺復興のために力を尽くした西岡氏の生き方から学ぶことで、児童は興味をもちながら、我が国の伝統文化について、自分とのかかわりで考えていくことができるだろう。

（3）展開例

1　法隆寺の写真を見て、感じたことを話し合う。

2　資料「最後の宮大工」を読んで話し合う。

①大変な状況の中、法隆寺のために尽くしてきた西岡さんを支えたものは何か。

- 伝統や文化を愛する心。

②貴重な文化財を復興させてきた西岡さんが、振り返って思うことはどんなことか。

- ご先祖様の思いを受け継ぐことができた。
- 未来の日本人も、この伝統文化を大切にしてほしい。

③西岡さんの生き方からどんなことを学んだか。

- 日本の伝統や文化は、こういった人の努力に支えられているんだ。

3　未来へ伝えていきたい、日本の伝統や文化は何か。

4　教師の説話を聞く。

（4）指導上の留意点及び工夫

法隆寺は有名であり、社会科の学習でも取り上げられるなど、名前は児童に広く伝わっている。その法隆寺が、以前は大変な状況だったことなどから、児童が驚きをもって、資料の世界にふれられるようにする。

〔本文イラストは東京学芸大こども未来研究所による〕